

「俺の人生」ドキュメンタリー

(ラップ)

…やるっていったら絶対やる
そう考えればなんでもない
どんなことだって乗り越えていける

藤沢匠子「まあこんな人生だね。なんとなく悲しくなるわな」

門脇篤「いやいやいやいや…悲しくなります？ 私はですね、『あれ考えればなんでもない、どんなことだって』…」

藤沢「やってきたことだから、全部さ。こういうのやってきたんだから、ああこんどきに、息子はひどかったなってこう、そういう風なイメージが出てくっちゃ」

門脇「ご本人はね」

藤沢「だから私の話よ。あんたの話でないのよ」

門脇「聴く者はですね、勇気を…」

藤沢「私が見てだよ。自分のことだから、ああこんどきは何しても苦しいし悲しかったなってこと、あるっちゃ」

門脇「確かに他人事だからすごいなあですみすけど、ご本人は…」

藤沢「こんどきはあんなに苦しい思いしたけどなんとか乗り越えた。悲しかったなって、感情が出るっちゃ。本人はだよ。あんたらはどうでもいいのさ。この人、楽観的に物事を考えてやったぐらいに考えるでしょって」

そんな風に語る藤沢匠子さんは昭和3年（1928年）7月3日生まれの88歳。昨年2015年6月に復興住宅に入居しました。

引っ越しは、姪や甥ら親戚だけでなく、いろいろな人が手伝ってくれたと言います。藤沢さんには助けしてくれる人がたくさんいます。息子さんが入院中のため、実質的にはひとり暮らしですが、藤沢さんの部屋にはいつも誰かがいて、飲んだり食べたり楽しい場になっており、仮設住宅の時から自治会長に「ここは第二の集会所だ」と言われていました。

藤沢「ここでは、ひどい話はしないこと。楽しい話をしないとダメよ。私は苦しいとか、いい家に育ったんだとか、そんなこと聞きたくねって。なにおめえって、そうなっからさ。そんなもん、見てねえからわかんない。おもしろくも（おもしろくも）おかしくもねえつつの。みんながね、来てけっから（来てくれるから）生きてられる。そう思うな。話すだけでも違うっちゃ。だからみんな言うのね。あんたがいなくなったら（いなくなったら）、どこでお茶飲めばいいのって。ふざけんなこのつつの。なんとか生きてるほらって。行くところないからね」

藤沢さんが生まれたのは仙台市裏柴田町。当時、「吉田女学院」の名前だった現在の聖和学園や仙台一高のすぐ近くでした。お姉さん二人は仙台の目抜き通りにあった写真館に写真が飾られるほどの器量好しだったそうですが、ご自身は幼少時代、「男だと思われていた」と言います。そもそも「おなかに入ってるうちからよく動くから、これは男にちがいないと思って喜んだら女だった」とか。

女学校に上がる頃に第二次世界大戦が勃発。青春時代は薙刀に精を出し、県大会にも出場するほどの実力の持ち主でした。しかし戦況が悪化するにつれ、学徒動員で、学校に月謝を払いながら、軍の造兵所で鉄砲の弾などをつくる毎日を送りました。

ある日、宮城野原にあった造兵所へ向かう途中、藤沢さんは戦闘機から機銃掃射を受けます。必死で道端に身を伏せた足元にバラバラと石ころがぶつかり、藤沢さんはもうこれで自分の足はなくなったと覚悟したそうです。幸い、どこもけがはありませんでした。

仙台空襲も経験しました。火事は仙台一高の前で止まり、家は焼け残りしましたが、その地獄絵は今でも目に焼きついているそうです。

17歳、女学校卒業の年の夏、終戦を迎えました。占領軍の寄宿舍が家から近く、「危ない」と外に出してもらえない日々が続きました。そんな中、親戚の世話で藤沢さんは日通の仙台支社に就職することが決まります。18歳、配属先は秘書課でした。

しかし血気盛んな藤沢さんは、「仕事は封筒分けか客の接待。一生やられるものではない」と上司にかけあい、管財課に配置転換してもらい、経理を覚えます。これがのちに藤沢さんの人生を拓いていくことになります。

占領軍を恐れた両親は、そのうち「兵隊が怖いからやめてほしい」と言い出し、藤沢さんは半年あまりで勤めを辞め、ドレスメーカー学院、宮城文化服装学院、長谷柳絮学園といくつもの洋裁、和裁の学校を掛け持ちして通うようになりました。

はじめはまじめに通っていた藤沢さんですが、戦争で奪われた青春を取り戻すかのように、学校以外の場所へと足をのばすようになります。

藤沢「ものさしを片付けて、遊ぶのさ。で、あそこ荒町にダンスホール教習所というのがあったのよ。昔の話だからおもしろんだ（おもしろいんだ）。3人いるんだから、おらいの（私の）近所に。一人娘だからみんな。どこでどうやって遊ぼうかって、3人で、あそこでダンス教えんだとや（教えるんだそうだ）って、そこさ行ったのよ。あそこがあんべえわりかったべやな（?）。ほいで覚えた。それじゃダメだ、と。バレたのさわ。親って見てるもんだって、あんだ。ほすつと玄関だいっちゃ。こういう玄関。カラカラカラって開く玄関よ。階段、たっただって降りってね、玄関カラカラって開かっつと、『どこに行くの?』って言われっからさ、『うん、ちょっと。友達ちに』『うちでお話ししたら』とこうなる。うちじゃあダメよ。ほしたらね、閉めんの。身体入るくれえ開けて。カラカラって時間かけて閉める。で、このくれえ開けんだよね。で一回、二階さあがって、静かーに降りて出かける。『また逃げらった』って怒らって…人生そんなものよ」

そんなダンス通いが高じて、知り合った男性と藤沢さんは駆け落ちに及びます。しかし22歳（ナレーションでは「23歳」となっているが誤り）と20歳の世間知らずの若者。駆け落ちしたはいいけれど、どうしたらいいかわかりません。3日後には親が警察に届け、ふたりは親元へと引き戻されました。そして「しめしがつかない」と式をあげることに。ご主人は特攻隊で、出撃間際に飛行機が故障したために命拾いをした方で、藤沢さんと出会ったときは大学生だったそうです。そんなふたりの夫婦生活は、藤沢さんらしいユニークなものでした。

藤沢「毎日実家から親が迎えさ来んの。2日行かねえと迎に来る」

門脇「それはご実家が、会いたい、と？」

藤沢「違うっちゃ。食わねでいるんでねえかって、親は心配すんよ。うっちゃ行くと（家に行くと）すぐ戸棚開けて食うべや（食べるわけだ）」

門脇「住んでるのは、嫁入り先ですよ」

藤沢「住所だから」

門脇「朝起きるじゃないですか。まず朝ごはん食べるんですよ？」

藤沢「でもね、ご飯てね、ばんつあんがつくるご飯だいちや。ほおすっとここに釜あっぺ。一膳は分けて
けっぺ」

門脇「ちょっとお代わりしにくいと」

藤沢「(笑) 嫁御はそうなっぺ。だから早くうつつあ行ってなんだりかんだり食った方がいいべ」

門脇「じゃあ結婚生活って…」

藤沢「ないよ。この人とね、だいたい5年間いっしょにいたっちゃ。その半分以上は実家にいっから」

そんな中、藤沢さんは住んでいた家が流されるという体験をします。昭和25年（1950年）、熱帯性低気圧に伴って流入した温暖な海洋性赤道気団が三陸沖を移動しつつあった冷氣団に衝突。一週間以上にわたる長雨となり、山間部では1日の雨量が400ミリに達しました。下流域では大洪水となり、多くの家が流されました。当時、広瀬川沿いに住んでいた藤沢さんは、生まれて半年になる息子を連れて避難。翌朝戻ると家はありませんでした。

門脇「じゃあ流されて…」

藤沢「流されて、うちねえもの、今度はばあちゃんがひどいちや」

門脇「ばあちゃんと旦那さんはどこへ？」

藤沢「おらい（うち）だっぺ」

門脇「藤沢さんの実家に転がり込んだと。やっとな夫婦生活が！」

藤沢「夫婦にはダメだいちや」

門脇「ダメですか」

藤沢「ダメって、ばあちゃんが嫌でしょう。嫁御のうちさ入り込むなんて」

門脇「そんなこと言ってもねえ」

藤沢「だから少し待ってて、そして今度私が親さ『なんかダメだ』と。『長町にうちを買って』ってたのんだ。で買ってもらった。だんなが実家に転がり込んだ。ばあちゃんがいやでしょう、嫁の家なんて。それで実家に金出してもらって長町にうち買ってもらった

門脇「えー！すごいですね」

藤沢「すごくはねえのよ。ねえもの」

門脇「藤沢さんちお金持ちなんですか？」

藤沢「ないの無いの」

門脇「そんなポンポン買えるもんじゃないですよ」

藤沢「なんくそってやってからほれ。やんねけりゃあばれっからさ。あばれんの好きなんだ」

そうして洪水を乗り越え、二人目の子供である娘さんを授かった4ヶ月後、今度は旦那さんが亡くなるという悲劇が藤沢さんを襲います。息子さんはまだ3歳でした。

藤沢さんは女手ひとつでふたりのこどもを育てあげます。息子さんは仙台一高、東北大と進みましたが、時は大学闘争時代。東京に行って、警官隊から放水を浴びて帰って来るといった毎日だったそうです。

藤沢「大学闘争あったべあれ」

門脇「ありましたねー」

藤沢「あれに巻っこまって東京の方行ったりしてびちゃびちゃになってけて来て。ほんで今度大学さ行きながら会社を起こしたの」

門脇「え、息子さんが？ やりますね」

藤沢「やってみろつたの。大学さ行きながら入れながら板金屋」

門脇「大学行きながら板金屋！」

藤沢「板金屋を起こした。『藤沢板金』って。機械がいっぱいだっちゃ。機械がおっきいのよ。ズンズン増えんだ。そしてなんとかなって来たっけ、病気になった」

事業が軌道に乗り始めた時、またしても藤沢さんを大きな試練が襲います。息子さんが脳血栓で倒れたのです。半身不随となり、寝たきりの生活となってしまいました。雇っていた職人たちには暇を出し、会社をたたむことに。さらには娘さんまで白血病におかされていたことが判明します。

こどもたちの看病生活を送る、ちょうど還暦を迎えた藤沢さんに、知り合いだった仙台駅長が声をかけます。

藤沢「仙台駅長が友達だった。息子もダメ、娘は白血病でひどい。なんとかね、落ち着いたらね、その駅長が『なんだ藤沢さん、そんなことしてるよりも少し稼いでみたら』って。朝にご飯食わせっぺ。洗濯して稼ぐのはいいけども、こどもたちにご飯食わせないといけない。だから自由に昼は帰れるのが条件。仙行くっちゃ。で昼間戻って茶碗洗ったり、夜のご飯用意しなきゃねえっちゃ。あてにしてねえから、そうになったら、嫁は。仙台駅でイベントがあんのね。いろんなイベントあるし、人が足んないところには行かねげねえし（行かないといけないし）、計算は時間…あそこにJRの長町駅のこっちの方にね、管財課ってあったっちゃ。そこさも出てたさ、計算とかな」

門脇「経理というか」

藤沢「経理。男の人ばかりだっちゃ、JR。だから『飲みさ行くべ』とかって、『んで、行くべ』って」

還暦を迎えてなおこどもたちのために身をこなにして働く藤沢さん。しかし、そこにもまた大きな試練が待ち受けていました。

藤沢「息子の段取り」

門脇「段取りした上で…」

藤沢「全部よ」

門脇「JRの仕事して…すごいですね」

藤沢「うっちゃ帰って9時だいっちゃわ。だっけ、ばんつあんはいらないうって嫁御に言われたの」

門脇「ほお」

藤沢「ああそうか。んだら『いいから』つつた。『わかった』つつってなんにも言わないで出たら怒ったの、実家で。『自分のもの何回投げてんの（捨ててるの）』って。『何回金とんの』って言ったの、姉に。

しかし試練はこれで終わりではありませんでした。脳血栓で半身不随だった息子さんはさらに喉頭癌を患い、声も出ない状態に。75歳まで仙台駅での仕事を続けた藤沢さん自身も大腸ガンを患います。しかし手術後3日で「医者とケンカして退院した」という藤沢さんは、その後も息子さんの看病にあけくれる毎日を送ります。そうして迎えたのが2011年3月11日。東日本大震災でした。

住んでいた家は全壊。部屋の角にいた藤沢さんは一命を取り留めます。岩沼に住んでいた孫が迎えに来ましたが、そこからでは息子の看病にいけなると仙台市にかけあい、長町の仮設住宅に入居しました。入居した当初は知り合いもなく、まわりが支援物資をもらっているのも気づかないほどでしたが、そのうちに持ち前のバイタリティを発揮し、部屋にはいつも誰かがいるような、コミュニティの拠点になっていきます。

門脇「素晴らしいですね～」

藤沢「素晴らしかねえけど、だってそういう流れになんなかったら首くくったってはやんねえべ（しかたないでしょう）。子供殺してもいらんねえべ。なあ？」

門脇「過激な発言ですね（笑）」

藤沢「今流行ってからよ。今流行ってっぺ」

門脇「なるほど」

藤沢「私の人生そういうの。そいで今に至ってんの。親も死んだしきょうだいもみな死んだから、今度はたよらんないから、葬式代あればいいわ、と」

門脇「いやあ、壮絶なですね」

藤沢「だから書いたらおもしろいべな（おもしろいだろうな）って言ったんだけど…私の人生はすごいよ。そういう人生もあるんだ」

こうして藤沢さんとラップをつくることになったわけです